



E c h o No. 1 7 5  
 令和7年 正月号  
 院寺寺寺  
 峰福林禅  
 一禅禅宗  
 \* \* \* \*  
 羽村臨濟会

# バナナと人は紙一重

地球上に存在する全ての生物は、同じ起源を持つことが判明しています。38億年前に海の中で誕生した単細胞の生物が進化と枝分かれを繰り返しながら、今日の多種多様な生物になったのです。人は母親の胎内でその38億年の進化をたどるようで、受精の瞬間は地球最初

の生命と同じ単細胞、すぐに細胞分裂を始めて多細胞になり、魚だった時のエラのある状態、両生類だった時の手に水かきがある状態、鳥だった時の背中に羽がある状態（肩甲骨がその名残）、尻尾が生えていた状態（尾てい骨）を再現しながら、最終的に人の形になるのです。人間は他の生き物と何ら変わらない存在なのです。全ての生物の遺伝情報はA、T、G、Cで表される4種類の塩基で構成されており、種の違いとはこの4種の構成が違

なのです。

起源が同じで枝分かれした証拠に人間とチンパンジーの遺伝子は96%が類似、猫は90%、ネズミ85%、ニワトリ60%、昆虫のミバエが61%類似、さらに驚くことに植物のバナナですら人間と60%類似しているというのです。人間として生まれたことを当然のように思っていた私たちは、わずかな違いで、バナナだったかもしれないのです。

こうしてみると、私達が人間としてこの世に生まれ生きていることは奇跡のような事です。せっかく人間として生まれたのですから、その生命を精一杯に生きていきたいものです。

また、人間となんら変わらない兄弟のような他の生命を私達は毎日食べているのですから、「いただきます」という感謝の気持ちを忘れず、これまで頂いてきた多くの生命の分もあわせて精一杯生きていきましょう。

（禅林 恭山）



## 〜禅語に学ぶ〜

# 諸行無常

しよぎようむじよう

「諸行無常」の「諸」は宇宙の万物を表す言葉で、「行」は変転し流動していること、「無常」は全て無に等しいことを表しています。つまり、「世の全てのものは移り変わり、絶対というものは存在しない」という意味になります。

身近な例を挙げると、喜怒哀楽など感情の変化、若さや老いといった心身の変化、進学や仕事といったキャリアの変化、現金からキャッシュレスに変わった等々あります。また、楽しいことや苦しいことも同じように過ぎ去っていき、いつしか忘れていきます。このことから、私たちは「常に同じ状態は無く、変化し続けながら生きている」ということがわかります。

この「諸行無常」が伝えたいことは、

単に万物が変化し続けていることだけではなく、「執着(苦しみ)」からの解放です。いつまでも若さを保ちたい、いつまでも同じ地位にいたい、楽しく暮らしたいといった、良い状態をいつまでも保ちたいと思っただけは人間誰しもあると存じます。また、人間関係や肉体など、今の状態がいつまでも続くと思いつまんでしまふこともあるでしょう。このように、不変なものや永遠のものを求め続けることは「執着」となり、自分を苦しめる要因となつてしまいます。

つまり、「諸行無常」は、不変や永遠を求める「執着」を手放し、変化することが自然の一部であると「受け入れる」ことの大切さを伝えているのです。

また、私たちの命には限りがあり、いつどのように死が来るかなんて誰も想像することが出来ません。「無常」を受け入れることにより、今あるこの瞬間を大事にしようと思えてくることでしょう。

自分自身に限らず、家族や親しい友人も

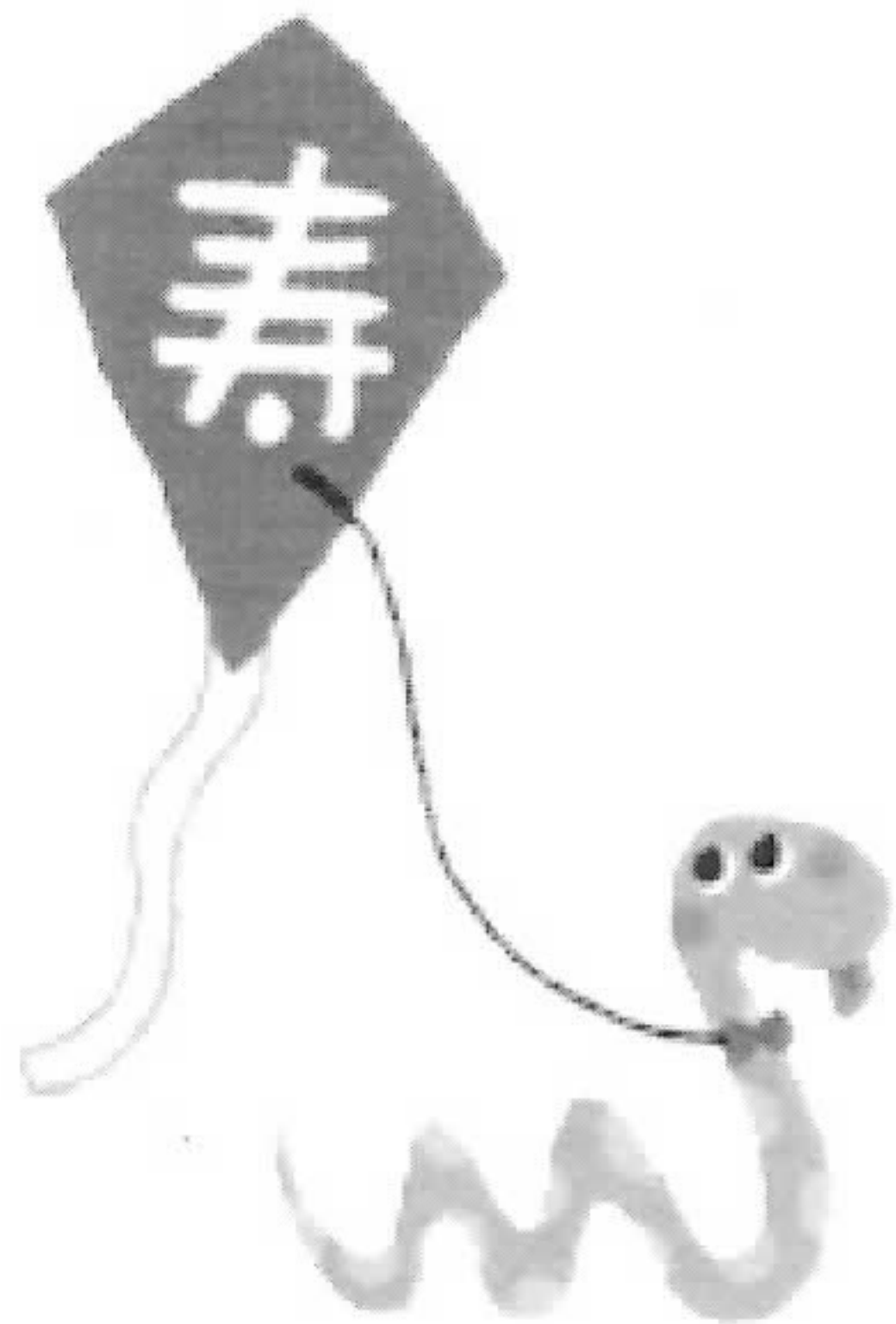
同じことです。今側にいてくれるかけがえのない存在に、改めて感謝をしてみましよう。

このように、「諸行無常」という言葉は、私たちに様々なことを教えてくれます。皆さまはこの言葉からどのようなことを感じたでしょうか。

お釈迦様は、この世の全ては絶え間なく変化しているという、ありのままを述べました。言わばこの世の真理です。時に私たちは、この当たり前前のことを忘れてしまうことがあります。

新年を迎えた今だからこそ、「諸行無常」を心の片隅において頂き、変化の激しい現代を恐れることなく、ともに歩んでいきましょう。

(禅福 尚玄)



# 禪と共に歩んだ先人

## 山岡鉄舟 XVIII

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化されることにより、自分自身を高め偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思えます。

### 鉄舟の剣

この項の冒頭に鉄舟は禪・剣・書において超一流であったと著しました。今回は鉄舟の剣について書きたいと思えます。弱冠21歳で講武所の世話役に抜擢された鉄舟は更に鍛錬を重ね技術の向上に勤めておりましたが、なかなか鉄舟の眼鏡にかなう良い師匠にめぐり会う事ができずにいきました。そんな中、浅利又七郎と

いう人物と試合をする機会があり、その達人ぶりに感動した鉄舟は早速その門下生となつて剣の修行にはげみました。

浅利との稽古は、毎回同じでした。道場で互いに木刀を持って対峙しますが、だんだんと浅利の気迫に押され鉄舟が壁まで追いやられます。その度中央へ戻つてやり直しますが、最後は縁側へおとされ終了となります。鉄舟は浅利に一度として勝てないままでした。

鉄舟は禪の修行にもはげんでいた事は先号にてお話しました。龍澤寺の星定和尚のもとで大悟した鉄舟は、その後も禅の修行を怠らず、その悟りをより深いものへと研ぎ澄まさせていったのでした。

そんな中で、鉄舟は坐禅修行中に浅利の面影が眼前に立ちほだかり、のしかかる様に圧迫される様になりました。当時参禅していた天龍寺の滴水禅師に相談した所、「それは幽霊というものだ」といわれ、そんなものをはね飛ばす「衝天の気迫」を会得せよと命ぜられました。

それから3年、さらに修行を積み重ねた鉄舟は「絶対無」の心境を坐禅中に得たのでした。試しに浅利に対して試合する形を坐つたままやつてみても昨日まで

重くのしかかつてきた浅利の幻影が現れできません。これはという事で、門弟である籠手田安定を呼んで試合をしてみますと、ちよつと構えただけですぐに木刀を捨て「先生、ご勘弁願います」と叫んだのでした。「永年指導を受けてきたが今日の様な恐ろしい事は初めてで、とても立っていられない」とのこと、すぐに浅利を招いて試合をすると、鉄舟の気迫に押された浅利はすぐに「参つた」と負けを認め、面をはずし、姿勢を正して「貴下はすでに剣の極致に達せられた。とうてい前日の比ではなく、私も遠く及びません」こういつて鉄舟の境涯を認め、免許皆伝となつたのでした。この時鉄舟は45歳、浅利の弟子となつて17年の歳月が過ぎていきました。

以下次号 (一峰 義紹)



# 禅寺雑記帳

◆大谷翔平選手が今年も大活躍しました。肘の手術のリハビリ期間中で投手としての登板はありませんでしたが、指名打者として活躍、メジャーリーグ史上初めて50本塁打、50盗塁を達成してチームの勝利に貢献しました。

◆ホームラン王、打点王などナショナルリーグの打者のタイトルをほぼ総なめした大谷選手は、年間最優秀選手賞をはじめ名だたる賞を沢山獲得しました。

◆大谷選手のドジャースはポストシーズンも勝ち進み、ワールドシリーズも勝って頂点へ上り詰めました。その全米での視聴率は昨年より1.7倍だったとの事で、ニューヨークの名門ヤンキースが相手だったという事もあります。大谷選手の活躍が低迷していたメジャーリーグ全体の人気をも復活させているのです。

◆大谷選手が今年移籍したドジャースは名門で元々強いチームですが、大谷選手の加入が良い影響を与え、更に強くなつたと元からいた選手が口々に語っています。誰よりも練習熱心で、スランプでも絶好調の時でも気持ちの波が無く、ユーモアも持ち合わせ、誰にでも公平に接するその姿勢が見本となり、チーム全体の士気を高めたというのです。

◆過去にメジャーリーグで活躍したスーパースター選手たちも大谷選手のファンであることを公言し、口々にその凄さや人間性の素晴らしさを褒めたたえています。日本人として自分が褒められているようで、とても嬉しくなります。

◆仏教とは、人間が生きている間に「仏」になることを目標とする宗教です。仏とは悟りを開き、その悟りのお陰で常に「正しい事」をやる人のことです。

◆逆に言えば、「正しい事」をしている間は、行為としては仏になったのと同じ事になります。

◆「正しい事」とは、その時その時の「今ここ」の縁で与えられた自分の役割に成り切ってこれを果たすことです。どんな立派な行為でも、タイミングがずれていたらそれは正しくなくなるのです。

◆たとえば、お経を唱えることは立派なことですが、会社で勤務中にこれを行つたとしたらそれは正しくありません。

◆お経を唱える時間にはお経に成り切つて唱える、箒を持って掃除する時には箒に成り切つて掃除する、この「今ここ」に成り切る三昧底を「禅」といいます。

◆大谷選手は、投げる時は投げる三昧、打つ時は打つ三昧、走る時は走る三昧、ゴミがあれば拾う三昧です。野球選手としての「今ここ」が最大限に発揮出来るように、練習という精進を重ねる求道者で、彼は野球界の禅者であり、仏です。

◆打者として凄い大谷選手が、今年も投手としても帰ってきます。どんな活躍を見せてくれるか楽しみです。その開幕戦は、日本、東京ドームです。(禅林 恭山)